

特集 見えない沖縄から

2～4面 寄稿・謝花直美（沖縄タイムス記者）

5面 大地は叫んでいる

6面 上間陽子さんから聴いた、沖縄

The Young Women's
Christian Association

YWCA

8

AUGUST
2022

No.769

〈第33総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

www.ywca.or.jp

琉球・沖縄の 想いを聴く

沖縄は、150年ほど前まで琉球という国だった。

1429年に統一された琉球王国は、貿易によって栄え、
独自の豊かな文化を築いていた。

1879年、明治政府による琉球処分で沖縄県となり、
戦争では、県民4人に1人の命が奪われた。

敗戦から27年間、米軍の統治下で戦後「復興」を歩み、
1972年、本土に「復帰」した。

それから50年、島の人は何を想う——

見えない沖縄から

沖縄タイムス記者 謝花直美

「ちむどんどん」が描かないもの

NHKのドラマ「ちむどんどん」。

1960年代の沖縄島北部の架空の「やんばる村」から始まり、川崎市に舞台を移し料理人を目指す女性の成長物語だ。「やんばるの森」が2021年ユネスコの世界自然遺産に指定され地元が沸き返る中、全国放送されるドラマの舞台になった。観光誘客の後押しになると期待の声も上がる。

しかし、前評判ほどの関心は抱かれていないようだ。「復帰」50年の節目なのだから、当時の沖縄の状況が写し取られるものと期待があった。私は、主人公より8歳下。子どもだったが「復帰」の記憶をもつ世代としてドラマに違和感を抱いた一

人だ。当時はベトナム戦争の最中で、どこにでも米兵の姿が見られたからだ。軍道1号（現国道58号）をトラ

ックの荷台に座り移動する米兵たちに、子どもたちは反戦シンボルVサインを向けて、ピースと呼び掛けていた。1968年にベトナムに出撃するB52が嘉手納飛行場に墜落した時に激しい抗議が起きた。耳で聞いたままに「ビーコニ、テッコ」と記憶したのはシュプレヒコール「B52撤去」。地鳴りのような響きを立てるデモ隊が脳裏に焼き付く。当時の沖縄はベトナム戦争と直結していた。しかし「ちむどんどん」にそんな殺伐とした様子は映らない。現実から伝えたい部分を切りとってきれいにまとめた、そんな印象を抱いた。

「やんばる村」は架空だが、主人公の実家のロケ地は北部の東村高江



沖縄島北部は豊かな「やんばるの森」が広がる。その一部、東村高江には米軍のヘリパッドが強行建設された

だ。集落から約2キロ離れた山中に米軍北部訓練場がある。60年代、訓練場には「ベトナム村」が造られた。ベトナムの戦場を模し、丸太を突き

立てて米兵の攻撃に備える仕掛けなどを再現した。演習で、高江住民はベトナム人役を務めるように強制動員された。従わざるを得なかったのは、生活を支えた山への出入りを米軍に禁じられないためだった。現在の高江は集落を囲むように米軍ヘリパッドが設置される。2017年民間牧草地に米軍ヘリCH53Eが墜落し炎上した。住民は米軍に圧迫され続け、抗議活動が続いている地域だ。その高江がロケ地なのだが、米軍の姿は見えない。娯楽性を追うドラマが現実を全て反映することはない。しかし、「復帰」によって米軍基地撤去を求めた沖縄の人々の思いが碎かれ、さらに現在、辺野古に新基地建設工事が進む「復帰」50年。その年に放映される、歴史も現在も映さないドラマ「ちむどんどん」。それは皮肉な虚構の沖縄を語っている。



北部訓練場の演習を視察する高等弁務官一行。視線の向こうには「ベトナム村」がある(1964年 8月)沖縄県公文書館所蔵

見えないものが
染み出る時



米軍基地に食い込まれた沖縄
(沖縄県の資料を参考に著者作成)

この地図は、沖縄島にある米軍施設（専用施設）をくりぬいて示した。通常、地図で米軍基地を示す場合は別の色で示す事が多い。だが、そんな地図を上空から俯瞰する視点から眺めても、そこに住む人々の生活実感は伝わらない。むしろ入れない場所とは地図から消してしまうほうが分かりやすいと思う。沖縄を訪れたことがある人なら、国道沿いの長い金網の向こうに米軍基地を見たことがあるだろう。しかし見えているように見えないのが米軍基地の本質だ。米軍が基地を造るのに適したのは

平たんて水源がある場所だった。それは人が住むのに適した場所だ。だから、米軍基地となった場所は、沖縄戦前は集落や水田や畑があった。米軍によって集落が潰された人々は、戻ることができず基地周辺に金網にへばりつくように住んでいる。そんな土地すら確保できず離散して消えた集落も多い。村が消えれば人々の生きた軌跡や経験、継承してきた伝統や文化も消えてしまう。

米軍基地をくりぬきで示したのは沖縄の人々が自由に入れないだけでなく、そこが日本の法律が届かない米軍の論理が優先する空間であることを示すためでもある。それを支えるのが日本と米国が取り決めた日米地位協定だ。そのために、米軍基地の中では、何が起こっているのかが分からない。さらに、最近になって米軍基地から被害が「染み出す」とが次々と明らかになった。

2021年12月、沖縄県内で新型コロナウイルスは沈静化しつつあった。しかし、金武町のキャンプ・ハンセンで「オミクロン株」のクラスター

が発生し、米兵と基地労働者に広がり、またたく間に基地の外へも広がった。海外から米軍が日本に移動してきても、軍用機で直接米軍基地に入る場合、日本の検疫を受ける必要がないと、日米地位協定は定めている。1月下旬に沖縄県内は連日100人以上の新規感染者が出た。

米軍基地から有害な物質が、沖縄の人々の居住地域に「染み出す」。米軍普天間飛行場から有害な有機フッ素化合物PFASを含む泡消火剤が漏れ出す事故が2019、2020年と相次いだ。後者は14万トン（ドラム缶719本分）が流れ出し、大きな泡の塊が大量に住宅街を浮遊した。PFASは自然界では分解されず、体内に蓄積すると発がん性の危険がある。『琉球新報』が河川水分析を京都大学に依頼した結果、地下水汚染を判断する米国の指標値の6倍の247ナノグラムが含まれていたという。地下水脈にフエンスはない。米軍基地から流れでたPFAS混じりの危険な汚水が営々と住民の生活用水に流れ込んでいる。

嘉手納町では米軍嘉手納飛行場の機体洗浄や消火剤として使われたことによって、地域住民が大切にしてきた地域の湧き水や住宅の井戸がPFASで汚染されていることが、琉球朝日放送の精力的取材で明らかになった。

また、米軍基地からの「染み出す」被害は、コロナ以外の感染症でも起きている。米国のベトナム参戦により沖縄の基地は出撃と兵站を担った。米兵の大量駐留によって基地の中から、この時沖縄の人々へ風疹が広がったといわれる。米国では1964年風疹が大流行しており、同時期に沖縄でも流行した。先天性風疹症候群の408人の子どもが生まれた。当時沖縄の関係者は指摘したが、最近の調査や研究がベトナム戦争による米兵の移動との関連を明らかにしつつある。この問題を指摘した沖縄大学教授の若林千代は、「米軍基地の『ブラックボックス』化が改めてクローズアップ」されたとし、背景に地位協定、安保体制の枠組みの問題を指摘している。

焼失した首里城が 意味するもの

1945年の沖縄戦時に焼失し1992年に再建された首里城正殿は、2019年の火災で焼失した。その朝、焼け落ちた首里城が見える場所には、茫然とした人々がたたずんでいた。私もその一人だった。首里城が再建されて何度も足を運んでいたがそれほど愛着があったわけではない。しかし、焼け落ちたのちにその存在が実は琉球・沖縄の歴史を日常の中に見せる存在だったことに気がついた。沖縄戦で焼けた首里城の跡地に米軍が大学を造った。「復帰」後、戦前の姿を知る世代が期成会をつくり、移転した大学跡地での復元に結び付けた首里城。場所の記憶を塗り替え、見えなかった物が姿を現すこと。その意味を、失って初めて気付かされた。

沖縄戦では戦闘後のマラリア死も含め25万人の命が失われた。焼き尽くされ破壊され尽くした沖縄で、歴史を伝えた文化財や文物は各地の王

や按司（豪族）の居城でもあったグスク（城）の石垣などだった。豊かな琉球文化を語った寺院など木造建築、文物は焼き尽くされたからだ。こうした状況で、首里城はかつての琉球王国を目に見える形で再現していたといえる。県外や海外の人々が沖縄を訪れ文化的豊かさを見る首里城は、沖縄の人々には失われた歴史を語り伝える場だったといえる。

沖縄の人々は先達の歩みを歴史として学校で学ぶことはほとんどない。私は大学の非常勤講師として沖縄史を教えているが、講義で約150年前までは琉球王国があったと話すとき驚く学生が多い。中山ちゅうざんによる統一によって琉球王国が誕生したこと、各地域の王の英雄譚は知っている。しかし、それが近現代史に結びつき現在の沖縄を規定していることを知らないのだ。

こうした状況で、首里城はこれまで多くの人が学ぶことがなかった琉球・沖縄の歴史を気付かせ、中国の明・清、日本という大国の間で苦勞しながら生き延びてきた琉球・沖縄

の先達の姿を思い起こさせる。米軍基地問題で苦しむ沖縄がこれまで、これからいかに生き延びていくのか、先達の歴史を振り返りながら考える。そうしたことを考えるきっかけとなったのが、目に見える首里城だったといえるだろう。

「復帰」50年に、ほとんどのマスメディアが、沖縄の日本への「復

帰」があたかも自明であったかのような視点から報道していた。沖縄の人々が抱いた「復帰」すれば米軍基地がなくなるという思いは打ち砕かれた。「復帰」50年に、「復帰」が本当に自明だったのかを問い直す声は高まる。焼失した首里城はそれを問い直す場だともいえる。

ありし日の首里城正殿。15世紀の琉球王国成立から現在まで約550年の間に焼失と再建を繰り返し、琉球・沖縄と共にあり続けている



profile

謝花直美 [じゃはな・なおみ]

1962年、沖縄生まれ。大阪大学大学院博士後期課程修了。1990年、沖縄タイムス社入社。おもに沖縄戦・戦後史、生活報道に取り組み、徹底した現場取材に定評がある。2018年から沖縄大学地域研究所特別研究員。単著に『沈黙の記憶 1948年、砲弾の島・伊江島米軍LCT爆発事件』（インパクト出版会）、『証言沖縄「集団自決」 慶良間諸島で何が起きたか』（岩波書店）、『戦後沖縄と復興の「異音」 米軍占領下復興を求めた人々の生存と希望』（有志舎）など。



琉球・沖縄の先住民族 大地は叫んでいる

沖縄YWCA会長
糸洲のぶ子



首里以前の古都、浦添のグスク（城）跡。1609年、薩摩藩の琉球侵攻により廃城に。
沖縄戦では日本軍の陣地が数かれ、激戦地となった

がら着陸態勢で飛んできます。
2017年には近隣の保育園や小学校で落下物事故が起きるなど、常に危険にさらされています。

目の前のゲートの向こうには、沖縄戦の際に米軍に接収された土地が広がり、私たちは境界の黄色の線を一步でも超えると基地の警備員に警告されます。戦前は美しい琉球松の並木道であったところが無残にも破壊され、軍事基地として他国での軍事活動に機能していると思うと、本当に悔しいし、心が痛みます。自由に立ち入ることができない、そして、最近では、豊かな地下水源も有害物質で汚染され、飲み水さえも安全ではないことが分かってきました。空も土地も水も奪われ、命をないがしろにされているこの状況は、明らかに人権侵害です。

本当に悔しい、心が痛みます

2012年10月1日、沖縄にオスプレイが強行配備されて以来、毎週月曜日の午後6時から普天間基地野高ゲート前でゴスペル（賛美歌）を歌っています。もう10年になりますが、歌っている最中も私たちの真上をオスプレイが轟音を立てな

「しまくとうば」を話すと罰を受けた

2015年9月に行われた国連人権理事会での翁長雄志知事（当時）の演説は、琉球・沖縄は歴史・文化、土地、言語を搾取され、日本に同化させられ、沖縄戦後も基地を押し付けられている。この沖

縄の状況は県民の自己決定権や人権をないがしろにされている、というものでした。1879年の琉球併合以降、皇民化教育により同化政策を強いられ、沖縄戦の際には、しまくとうば（うちなーぐち）で話そうものなら、スパイ扱いされ殺された者もありました。戦後も学校では、しまくとうばを話す児童生徒は首に方言札を掛けられ、罰を受けました。私は教員であった両親のもとで育ち、家庭で話される言葉は学校と同じ標準語、そのため、しまくとうばでの会話は全くできないまま、歳を重ねました。私は、沖縄で育ちながら沖縄の文化を否定するような自分自身に違和感を持ちつつ、これが何なのか分かりませんでした。

先住民族には自己決定権がある

翁長知事の演説に対して、「自己決定権」は「先住民族」が使用するもので、沖縄人は先住民族なのか？ という議論が起きました。

「先住民族」とは、1989年に採択された「独立国における先住民及び種族民に関する条約（ILO169号条約）」によると、独自の文化や言語を持ち、歴史を育んできたのにも関わらず、近代国家によって植民地化され、同化政策を強制され、土地や文化、言語を奪われた差別的状況に置かれている集団としての意志を表示しうる人々となっています。

琉球・沖縄人はILO169号条約が規定する先住民族の適用範囲に該当

し、2007年に出された国連先住民族権利宣言では自己決定権を有すると位置づけられています。これによると、先住民族の合意がない限り、先住民族の土地を軍事に利用することは禁じられているのです。日本政府はアイヌ民族を先住民族と認めています。国連の勧告を受けながらも、琉球・沖縄人を先住民族とは認めていません。

沖縄全土が今も祈りの場

私は「先住民族か？」と問われた時に、最初は戸惑いましたが、自分のアイデンティティを自覚するようになって、沖縄に降りかかるさまざまな問題が根底から繋がってきたのです。

「沖縄戦の遺骨が眠る土砂を辺野古新基地建設の埋め立てに使うということ、死者に対する冒瀆である」と、沖縄戦の遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松さんは述べています。骨ばかりでなく、肉も血も染み込んだ大地の土、沖縄全土が今も祈りの場であると私は思います。



平和を願い歌い継がれる「月桃（ゲットウ）」の花。沖縄戦と重なる4～6月に開花する



上間さんの著書『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』（太田出版）、『海をあげる』（筑摩書房）



『海をあげる』の 上間陽子さんから聞いた、沖縄

琉球大学教授の上間陽子さんは、沖縄の夜の街で生きる少女たちの聴き取り調査をしている。その記録『裸足で逃げる』は、社会に大きな衝撃を与えた。今年5月21日、日本YWCAは「上間陽子さんに聴く、沖縄」と題して講演&トークセッションを開催し、沖縄から全国にオンラインで配信した。上間さんが語った「沖縄」を、再構成して報告する。

■夜中に家にいられない理由を

上間さんが少女たちへの聴き取り調査をするきっかけとなったのは、2010年に沖縄県内で起きた女子中学生への集団暴行事件だった。その少女は、一緒に酒を飲んだ少年3人から性的暴行を受け、自ら命を絶った。当時、自死した被害者とその家族に向けて、中学生が夜中に家を出て酒を飲んだことや、その時間に母親が家になかったことに対するパッシングが起こった。

もしこのとき「少女が家にいられなかった理由は何か」「なぜその母親は夜も働かなくてはならなかったのか」という問いがあったなら、この事件から沖縄の子どもたちが育つ厳しい環境が浮かび上がったはずだ。上間さんは社会調査という形で、沖縄の少女たちの置かれた状況をつまびらかにしなくては、と考えたという。

■今貧困と暴力の間で

聴き取りをした対象は、風俗業界で働く若者18名、10代で出産した77名。少女たちの多くは、家族や恋人による暴力、幼少期からの性的搾取の被害者であることが明らかになった。義父や兄、親族による性的虐待は想像以上だったという。困窮し孤立した家庭環境に育ち、小中学校で不登校になり、夜の街へ逃げ出した少女たちは「家よりも風俗店のほうが安全」「オーナーに助けられて

いる」「臨月でも働かせてくれて感謝している」という。

沖縄では若年出産が多い。10代の妊娠・出産率は2.6%で、全国平均1.1%の約2倍。その多くは、DV、孤立、困窮など問題を抱えて産み育てる。離婚しても慰謝料はなく、生活のために再び風俗業界で働く。少女たちの母親もまた、若年出産しており、若くしてママになった娘をサポートする余裕がないという。こうした状況は、沖縄が抱える貧困問題と無縁ではない。全国最下位の県民所得、子どもの3人に1人が相対的貧困状態^{*}にある。また、長男を尊ぶ男性優位の沖縄の文化が、事態をより深刻化させている。「貧困率3割の中で女性に暴力が集中している。これが何を生み出すのか、考えてほしい」と、上間さんは言う。

※沖縄県子供の貧困率調査（2016年3月）

■語られない言葉を読み解く

守られている子どもたちがいる一方で、他方には早い時期から性を搾取され、暴力を受けながらやっと生きている子どもたちがいる。その声は聴かれず、理解されず、適切な支援を受けられずにいる。暴力を受けることで傷つき破壊されているのは、身体だけでなく、自分を大事な存在だと思える気持ちや記憶だ。この子どもたちの支援に必要なのは、心と身体の傷をケアすることだ。学校や行政、周りにいる大人たちは、暴力にさらされても沈黙して生きている子



「おにわ」のママたちとの心温まるエピソードを語る上間陽子さん

どもたちの存在に早く気づき、行動の背後にある語られない言葉を読み解かなければならない。しかし、話を聞くだけでは間に合わないほど事態は切迫しているという。

■少女たちを輪になって守る

2021年、上間さんは、10代で出産する少女と赤ちゃんのためのシェルター「おにわ」を立ち上げた。「おきなわの にんしんした女の子たちを大人がわになって守る」の頭文字を取った「おにわ」では、福祉や医療と連携して出産の前後合わせて5カ月を応援する。大事なのは「ママが幸せを感じられること」だという。楽しい思い出を一つでも持っていてほしいと、100日祝いに振袖を着て記念写真を撮ることもある。「おにわ」の多彩な取り組みを紹介しながら、上間さんはこう言った。「逆境の中で産んでも、大人たちがママをしっかり支えたら、ママは赤ちゃんをしっかり支えるんです」（編集部）

加盟YWCA中央委員会報告

未来に備えて内側からの変革を

5月28日、2022年度加盟YWCA中央委員会がオンラインで開催された。今年も当日の議事をコンパクトに収めるために、会長会と議事に関する説明会が事前に行われた。事前説明会では理事会の下に新たに設置された「人材養成部会」と「平和のためのYWCA研究室」の活動状況と、今総会期も引き続き実施が決まった第3期LA（地域YWCAを主体とした活動）について詳しい説明がなされた。

当日は、開会にあたり、藤谷佐斗子会長の祈りに合わせて、むき出し

の暴力にさらされている世界の女性たちへの平和の祈りを捧げた。オンライン会議もすっかり定着し、全国の地域YWCAによる1分間アピールもスムーズに進行した。議事に入り、日本YWCA報告では、本格的に始動した5つの委員会の1年間の活動報告を聞いた。2022年度の事業計画として、夏の中高YWCA全国カンファレンス（オンライン）、秋の臨時全国会員総会とYWCAフェスタ（ハイブリッド形式）の開催が承認された。今年も最後に全国の地

域YWCA会員も加わって「地域YWCAジェンダー活動交流会」が行われ、全体会で日韓ユース・カンファレンスや国連女性の地位委員会（CSW）に参加したユースの体験を分かち合い、その後、テーマごとに少人数のグループに分かれ、発題を聞き、ディスカッションをした。

外には多くの課題があふれているが、YWCAの内なる変革はまだ緒に就いたばかりである。変化を恐れず進んでいきたい。

日本YWCA書記 吉田亜希

日本YWCA前総幹事メッセージ

「Enjoy!」オーストラリアのYWCAに行った時、スタッフに声をかけられました。「あなたの仕事、役割を楽しんで!」と。その本当の意味がわかったのはだいぶ後のことでした。楽しむとは、何も憂いがない状態ではない。苦労や困難もある中で、それをも飲み込み、乗り越えようと努める先にあるものだったのです。明るさ、笑いを忘れずに!

日本YWCA総幹事という役割をいただいたことで、地域YWCA、日本YWCA、世界のYWCAの働きが少しずつつながりました。出会った方たちの顔を思い浮かべる時、その全ての働きは、一人ひとりが大切にされる平和な社会の実現につながっていることが前よりも実感として感じられるようになりました。YWCAのさまざまな形で平和を追い求める働きは、真の深い楽しさに導かれるものだったと思います。

今、私たちは、時代の節目とでもいうべき時に遭遇しています。世界的な感染症、ウクライナ、ミャン

険しい道のりに
楽しさと希望を

日本YWCA前総幹事・
東京YWCA会員
尾崎裕美子



マー、パレスチナ等で続く想像を絶する暴力の連鎖、気候変動……国内外で不安と恐怖が押し寄せ、これまでの価値観や常識が覆されています。その混乱の時に、どこに立つかがまさに問われていると感じます。「非核・非暴力」、「平和憲法を活かす」、「イエスの生き方に倣い、社会的に弱くされた人の側に立って歩む」。YWCAのビジョン・ミッション

に連なるYWCAの立ち位置、原点は、アジア太平洋戦争に抗いきれなかった深い反省のもとで、平和への道を切り開いてきた先輩たちから手渡されたものでもあると思うのです。

そのことをしっかりと受け止めて、全国の仲間と共に進んでいきたいと願います。ともすれば深刻になりがちな険しい道のりの中にも楽しさと希望を見いだしながら。Enjoy!

エンパワーするNGO

YWCA
の本棚

『海をあげる』

著／上間陽子 発行／筑摩書房
1600円＋税

『裸足で逃げる』から3年、上間陽子さん（6面）が贈る初めてのエッセー集。「小さな娘のそばで沖縄を生きた痛み」を、本土の、東京の人たちに伝えたいと思つたと語る。穏やかで美しい筆致でつづられる、娘の成長を慈しむ日々の暮らしは、飛行機の爆音や土砂投入で赤く濁る海、暴力の脅威と常に隣り合わせだ。同時に、沈黙を余儀なくさせられている沖縄の人々の声を伝える。本書を貫く静かな怒り、悲しみが、沖縄の今を傍観する私たちに直視を迫る。

『戦後沖縄と復興の「異音」』
米軍占領下復興を求めた人々の
生存と希望著／謝花直美 発行／有志舎
2600円＋税

沖縄タイムスの記者として沖縄戦、沖縄戦後史に取り組んできた謝花直美さん（巻頭）は、歴史の記述から取りこぼされた「生活者」の声を聴き続けた。戦争で夫を亡くし、ミシン業で自立していく女性たち、軍港建設で故郷を奪われ、軍労働によって繰り返し移動を強いられた那覇の人々、米国民政府に抗い原爆展を開いて退学になった学生……。占領下の復興がいかなるものであったか、沖縄からの「異音」に耳を傾けたい。

book review

ご協力ありがとうございます

賛助費

郡恭子 斎藤喜子 鹿野幸枝
谷川いつみ

ピースメーカーズ募金

(平和を創り出す女性のリーダー
シップ養成)斎藤喜子 高木博己 谷川いつみ
西原美香子

木岡ファミリー基金

東洋英和女学院 中高阶 宗教委員会
日本バプテスト連盟

一般財団法人広島YWCA

災害時支援募金

(オリブの木キャンペーン募金)

斎藤喜子 鈴木律子 張善花
一般財団法人広島YWCA

(国内外の災害被災者支援)

嘉屋陽子 斎藤喜子

大阪女学院中学・高等学校
学校法人横浜共立学園

公益財団法人神戸YWCA

(ウクライナ支援)

大野綾子 柏木妙子 河崎純子
川畑幸子 清塚典子 細田美香神門佐千子 郡恭子 坂口和子
竹澤三佳子 鶴長美樹子都木恵子 仁木三智子 西村幸枝
町田洋子 山本康子 若松京子

渡辺陽子 和田博子

札幌北一条教会 日曜学校
一般財団法人函館YWCA

福島YWCA

東京YWCA まきば保育園

東京YWCA 武蔵野センター 会員同

東京YWCA ウクライナ支援募金箱

甲府YWCA

大阪YWCA 世界YWCA日集会参

加者一同

大阪YWCA ウクライナ支援募金箱

公益財団法人神戸YWCA

一般財団法人広島YWCA

広島YWCA シュムーに学ぶ会

沖縄YWCA

匿名

(パレスチナYWCA支援)

アシャワリード 有馬佳代子

糸洲のぶ子 岩田直子 植木知子

梅川玲子 遠藤真理 大崎雅子

川野安子 菊池あや 是常景子

斎藤未緒 高里智子 鈴木孝行

鈴木律子 柴田ひろ 玉生志郎

津戸真由美 照井秀子 外山真理

ナガサカリエ 中山実穂 新倉春美

西田茂 根内睦 根本博子

ノジリケンジ 長谷川りえ子

濱野道雄 久宗百合子 廣谷明人

藤谷佐斗子 堀部碧 幕谷安紀子

松原恵美子 八星恵子 山中絵利

山本康子 横山由美子 吉田亜希

一般財団法人平塚YWCA

京都YWCA ブクラ

匿名

東日本大震災被災者支援募金

嘉屋陽子 斎藤喜子 吉岡真紀子

捜真女学校 奉仕委員会

一般財団法人広島YWCA

(カーロサポーターズ)

柏木妙子 56件

カーロサポーターズ

(2022年4月16日～6月15日敬

称略)

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax. 03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 実生律子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | にお名前を送ってください / フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。